

1 胆石症ってどんな病気ですか？

胆汁は、食事で摂取した栄養素の消化や吸収を補助する消化液であり、肝臓で1日に500～1000mL程度つくられ、胆管を経由して十二指腸に排出されます。この胆汁が流れる道を胆道と呼びます。この通り道である胆道に石ができる病態を総称して胆石症と呼びます。この結石ができる部位によって、「肝内結石(1)」、「胆のう結石(2)」、「胆管結石(3)」（肝外胆管にできた結石）の3つに分けられます。

結石のできる部位は、胆のうが約80%、胆管が約20%、肝内が約2%程度であるため、一部の人は胆石といえば、胆のうにできるものだと誤解されています。

検査のはなし vol.13

専門医が解説する 病気の検査…7

「胆石症」

日本臨床検査専門医会
後藤 和人



2 胆石症になりやすい人は？

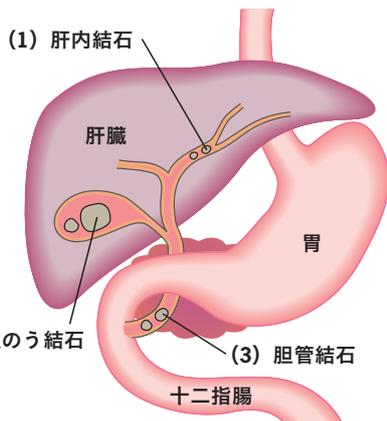
日本人の胆石保有率は、食生活の欧米化や高齢化などを背景に年々増加しており、近年では成人の10人に1人は胆石をもっていると類推されています。もっとも頻度の高いコレステロール石ができる人の特徴として「Fatty(太った)」、「Female(女性)」、「Forty(40歳代)」、「Fair(白人)」、「Fecund(多産婦)」であると報告されています。

これらに該当する人に加えて、美食家、血中コレステロール値の高い人、血縁者に胆石症患者さんがいるなど、リスクの高い人は早めに検査を受けることが大事です。

3 胆石症になったら どのような症状があるのか？

検診などで指摘される胆のう胆石の患者のほとんどが無症状です（無症状胆石）。しかしながら、一部の人には「胆道痛」といわれる特徴的な右の肋骨の下の部分やみぞおちの痛み、右肩に放散する痛みがある場合があります。この痛みは食後に出ることが多いので、十二指腸潰瘍などの消化器系の疾患との鑑別が重要であります。

まれに、皮膚や白目が黄色くなる「黄疸」という症状がきっかけで受診する患者さんもいます。胆汁が胆管にできた胆石などにより、その流れがせき止められて、血液中に流れることで黄疸になります。まれに、胆石が原因で胆のうや胆管に炎症を起こし、高い熱が出ることもあります。このような胆石症に感染が併発した場合、敗血症というきわめて重い病気を引き起こすこともあるため、注意が必要です。



4 胆石症を疑ったら どんな臨床検査をするのか？

胆石症の臨床検査には、血液検査、腹部超音波検査、CT、MRCP（磁気共鳴胆管膵管造影検査）、ERCP（内視鏡的逆行性胆管膵管造影検査）などがあります。胆石症の可能性が気になる人は、近医や検診などにて検査を検討しましょう。